



アート
ミーツ
ケア学会



NEWSLETTER

Vol.19 2021 Summer



CONTENTS

Report | 2020年度 九州大会
オンラインジャーナル vol.12
特集 | アートミーツケア叢書第3巻
リーダーズグループの試み
取材記
特別トーク



2020年度 アートミーツケア学会 九州大会報告

オンラインと東京・奈良にサテライト会場を設けた、ハイブリッド方式での開催となった2020年度九州大会。実行委員のおふたりの言葉で振り返ります。

2020年度アートミーツケア学会のテーマは「アートミーツケア・ミーツ・コロナ」。新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまであたりまえだった人と人との関わり方が一変しました。代替措置として始まったオンラインでのコミュニケーションでは、五感を使ったやりとりや、ちょっとした合間の雑談の大切さに改めて気づかされる一方で、これまでは不可能だったことができるようになっていきます。オンライン開催となった今回の学会では、こうした気づきや発見を共有することで、「アートミーツケア」の意義や可能性について考えることができたかと、オンラインならではの企画をいくつか試みました。

1. with コロナトーク

お便りコーナーのように、皆さんからお寄せいただいたコロナ体験を紹介。ゲストに、障害を通して人間の身体のあり方を研究している伊藤

亜紗さんを迎え、「さわる」と「ふれる」の違いなど興味深いお話をたくさん伺いま

した。寄せられたお便りを紹介するのに加え、会員の並河恵美子さん、ササマユウコさんには中継でご出演いただき、オンラインを使ったユニークな取り組みについて詳しくお話をいただきました。

2. アジアとともに：arts with COVID-19

アジア4カ国（ミャンマー、タイ、カンボジア、台湾）の人たちと中川真さんがリアルタイムで対話。日本とは異なり、政治や社会と強く結びついて展開される活動に触発されました。

3. オンラインから生まれるダンス：

障害・ケア・表現

エクスカージョンは九州大学ソーシャルアートラボと共催で実施。ダンサー・振付家として活躍する遠田誠さんと、身体の動きに制限がありながらも俳優として活躍する里村歩さんの二人による「遠隔ダンス・コラボ」が上演されました。遠田さんは東京、里村さんは福岡と遠く離れていましたが、息のあった二人のダンスからはその距離はまったく感じられませんでした。



オンラインエクスカージョンのシーン。遠田誠さん（左）と、里村歩さん（右）による即興ダンス

4. フリンジ企画

大会2週間前から企画者が自主的に実施。近年、分科会の応募が増加傾向にあるのを受け、思い切って時間枠をはずしてみました。8つの意欲的な企画が次々と実施され、大いに盛り上がりました。

フリンジ企画一覧（実施日順）

- 1 ほえとりふれくていんぐ——詩的にリフレクティング
- 2 あなたとわたしのせかいのおと
- 3 コロナ禍で実践される病院のアート・プロジェクト
- 4 初めてのオンライン・ワークショップ：高齢者に向けて
- 5 マスキングテープ・ミーツ・ホスピタル——医療機関でマスキングテープを活用する
- 6 きく音、えがく音
- 7 子育て女性応援プロジェクト Blow your worries——後ろめたさを吹き飛ばせ
- 8 オンライン絵本ワークショップ：「新しい日常」のモヤモヤをつかまえて受けとめる

5. 振り返り&トーク

最後に、盛りだくさんだった大会を振り返りました。改めてコロナ禍でもたくさんの興味深い活動や試行錯誤が行われていることを実感し、これからはしたたかにやっていこうと元気が湧いてきました。

（中村美亜 | 九州大学大学院芸術工学研究院・大会実行委員長）

九州大学が開催校となったにも関わらず、みなさんを福岡にお招きできなかったことは、とても残念なことでしたが、オンライン開催に踏み切ったことで、新たな発見、気づきも多くあったように思います。ここではオンライン運営を担当した立場から所感を述べたいと思います。



日時 | 2020年11月20日（金）～22日（日）

主催 | アートミーツケア学会

共催 | 九州大学大学院芸術工学研究院、九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ

後援 | 九州大学芸術工学部未来構想デザインコース

当日は、オンライン通話ツール「Zoom」を用いて大会が実施されました。奈良会場では番組のスタジオのようにマイクやカメラが準備され、九州大学では個人々のPCから参加するとともに遠隔での運営を行い、東京会場でパブリック・ビューイングを行う、という構成でした。

エクスカッションでは、このオンラインの強みを活かして、東京と福岡から中継をつなぎ、遠隔での即興ダンスパフォーマンスとトークを行いました。記録映像も残っていますので、ぜひご覧いただければと思います。

大会1日目はシンポジウムが続きました。情報保障ツールとしてUDトークを用い、希望する参加者が字幕を見ながらシンポジウムに参加できる体制を整えました。またZoomのブレイクアウトルームという機能を用いて、登壇前の打ち合わせを別部屋でやっていただくような気分で進行することも試みました。

大会2日目のポスターセッションでは、発表者ごとにZoomのミーティングを開設して、参加者が自由にそれをめぐる形となりました。通常のポスターセッションよりも静かな分、落ち着いた議論をしているポスターが多かったのが印象に残りました。

新型コロナウイルス感染症の脅威は未だ収まらず、今後もオンラインツールを活用、もしくは併用した学会運営を余儀なくされる可能性があります。ただ、今回オンラインのメリットも見

えてきました。1日目のシンポジウムのうちの1つは海外からのパネラーが多く、これはこれまで気軽にはできないことでした。また、エクスカッションで見られたように、この環境を逆手にとって新しいパフォーマンスをつくるという試みも進んでいます。

今回スタッフとしても活躍してくれた私の教え子である小松駿斗さんが、卒業論文で遠隔でのダンスパフォーマンスの分析を試みました。その中で、オンラインでのパフォーマンスにおいて空気感をできる限り共有するためには、お互いを意識し合い、「共に踊っている」ということを意識し続けながら踊ることが重要である、と指摘しました。このことは他のオンラインの取り組みでも同様かもしれません。自宅のPCの前に座っていながらも立ち現れる「いま・ここ」というあり方はどのようなものなのか、今後も実践をしながら考えていきたいと思います。

奈良会場を中心にオンライン舞台監督として活躍してくださったレ・コンテの加藤文崇さん、東京会場のパブリックビューイングに名乗りを上げ、独自のプログラムを多数展開してくださった笠原広一さん、当日の運営や情報保障に協力していただいた小松さんをはじめ九州大学の学生のみなさんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

(長津結一郎 | 九州大学大学院芸術工学研究院、大会実行委員)

アートミーツケア学会 オンライン ジャーナル

11

学会のジャーナルは第4号からオンライン化し、学会ウェブサイトでご覧いただけます。ご覧にならない方は送付いたしますので事務局までお知らせください。

第12号を発行しました

【実践報告】

ホスピタルアートの普及を目指して
——徳島の医療・福祉施設におけるマスキングテープアートの広がり

田中佳 徳島大学大学院社会産業理工学研究所 准教授
永廣信治 医療法人修誠会理事長、徳島大学名誉教授

アートによるトラウマインフォームドケアの試み
——トラウマが与える影響を可視化する

田口奈緒 兵庫県立尼崎総合医療センター 産婦人科部長

パーキンソン病患者のダンス活動に関するエピソード
記述による分析

古賀弥生 九州産業大学地域共創学部教授/
アートサポートふくおか代表

【研究ノート】

アートの表現／研究／実践と社会との再接点づくりの試み
——コロナ禍におけるオンライン授業実践からのアートグラフィックな探求

笠原広一 東京学芸大学 教育学部 准教授
細野泰久 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所/
武蔵野美術大学非常勤講師

古徳景子 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所/
チアパス州立芸術科学大学准教授

第13号 投稿案内

会員のみなさまから「論文」、「実践報告」、「研究ノート」を募集いたします。奮ってご投稿ください。詳しくはアートミーツケア学会ウェブサイトをご参照ください。

締切 2021年8月20日(金)

発行予定 2022年3月

2021年6月に刊行したアートミーツケア叢書第3巻。企画段階から数えると約3年かけて刊行にこぎつきました。責任編集にあたった中川真さんよりいただいたメッセージと、今回初めて試みた「リーダーズグループ」のお話です。

アートミーツケア叢書 第3巻『受容と回復のアート』 刊行に寄せて

中川真 大阪市立大学都市研究プラザ特任教授



大変長らくお待たせしました。ようやく第3巻の刊行の運びとなりました。これは、大変な困難に遭遇した人がそれを受け入れ、真摯に向き合い、そこから何らかの回復をめざすプロセスに焦点を当てた本です。この本に参加してくださった方々は 水野大二郎（京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab）、大橋香奈（東京経済大学コミュニケーション学部）、加藤文俊（慶應義塾大学環境情報学部教授）、高橋綾（元ひし形、芸名ハカセのほう）、

高原耕平（人と防災未来センター）、ほんまなほ（大阪大学COデザインセンター）、森合音（四国子どもとおとなの医療センター）、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）、田口奈緒（尼崎総合医療センター）、高濱浩子（美術家）、西村ゆり（光の音符）、五十嵐弘志（NPO法人マザーハウス）、緒方正人（漁師）の各氏です。現場での実践家、活動家、研究者、思想家など多様な背景の方々はこのテーマをお示しし、時間を割いていただきました。前半7名の方々の5編の論稿、後半6名の方々の5つのインタビューから構成されています。さすがに「困難にぶつかり、それをなんとか乗り越えて回復に至る」という楽観的なストーリーにはならないだろうと思っていましたが、原稿が集まってくるにつれ、予想を上回るすごい現実に圧倒されることとなりました。書き手、語り手の皆さんは自己の声にとことん耳を傾けられています。そして何かが変化する一瞬が描かれています。他者の介入の余地のない、自己との深い葛藤や対話を通して得られたある種の覚醒が浮かび上がります。私の背筋はピンと伸びました。確かに、他人から言われて何かを変えることに比べて、自分の力で変えるのはしんどいですが深さが違います。この方々が生き延びておられるのは、そのしんどさに誠実に向き合わ

たからだと思います。

一人の人間の魂の遍歴は単純なものではありません。魂の修復をめざしても、より深い疑念と後悔の淵に彷徨うことになるかも知れない。そして、その疑念や後悔こそが人の魂を救うかも知れない。だから逡巡や失敗に大きな価値があるような気がします。しかし見事なのは、この方々が大きな決断をして、闇のなかの嵐かもしれないけれども、光明を求めて出発されたことです。

「他者によって私たちは生かされている」というのは確かにそうかもしれませんが、その他者とは私たちの周りにいる人間だけではありません。ある人は草木からの語りかけが大きなきっかけとなっています。あるいは亡くなった人、そして未来に生まれる人からのメッセージも。どれもが他者です。本書では、他者とはそういった途轍もない広がりのあることを教えてくれます。自己を知るということは、その広がりななかでの自分の位置を確かめることに違いありません。自分は世界のどこに立っているのだろうか、どこに向かおうとしているのだろうか。受容と回復の物語の中にはこの問いが常に響いています。もうすぐお手元に届きます。じっくりと味わっていただければ嬉しく思います。きっと他人事ではないように思われますよ。

リーダーズグループの試み

アートミーツケア学会叢書第3巻の編集にあたっては、異なる専門性をもった人の意見も聞きながら、考えが偏らないよう編集作業を進めていきたいという意図のもと、リーダーズグループを結成し、本全体の質をより高めるために編集に関する助言をお寄せいただきました。お声がけに承えてくださったリーダーズグループのメンバーは以下の4名です（順不同）。

井尻貴子さん

臨床哲学／NPO法人こども哲学・おとな哲学 アーダコーダ

森川弘美さん

ソーシャルワーク論／天理大学

坂倉杏介さん

社会学・コミュニティデザイン／東京都市大学

森岡正芳さん

臨床心理学・文化心理学／立命館大学

リーダーズグループのメンバーには、論文査読のように修正要求や修正されたかどうかを確認する義務は生じません。執筆者にも、修正義務は生じません。査読ではないという前提で、細かい部分には囚われず、全体の骨子や執筆者の眼差しなどに注意を払って読んでいただきました。

いただいたコメントは、具体的な指摘というよりは、抽象的な意見や感想が中心でした。執筆者のみなさんにそれをフィードバックし、リーダーズグループの意見や感想も汲み取っていただいたうえで、さらなる推敲を加えていただきました。アートミーツケア学会叢書第3巻はそのようにして生まれました。

叢書目次

監修のことば ほんまなほ

はじめに 中川真 大阪市立大学都市研究プラザ特任教授

TRANSITION——ままならない状況下の生活を記録するための試論

水野大二郎 京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab 特任教授、

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科特別招聘教授

大橋香奈 東京経済大学コミュニケーション学部専任講師

加藤文俊 慶應義塾大学環境情報学部教授

インタビュー人魚の養生

ブブ・ド・ラ・マドレーヌ アーティスト

苦しみを生きのびる——苦しみと回復についての臨床哲学的「当事者」研究

高橋綾 元ひし形、芸名ハカセのほう

インタビュー「いろいろなことがあるけれど、すべて私の人生」と思えるように——トラウマインフォームドケア

田口奈緒 兵庫県立尼崎総合医療センター 産婦人科医師

高濱浩子 画家

「だから」と「それから」——K復興住宅のミノルさんのこと

高原耕平 人と防災未来センター研究員

インタビュー「あなたたちも人間だ」——インドのスラム街での表現活動

西村ゆり 光の音符代表

こえ、ことば、からだ、そして、うた——〈たましい〉の回復について

ほんまなほ

インタビュー対話を通して人は変わる——受刑者、元受刑者の社会復帰を支援する

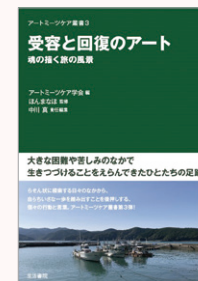
五十嵐弘志 NPO法人マザーハウス理事長

小さな扉

森合音 四国こどもととなの医療センターホスピタルアートディレクター

インタビュー「ひとり」から始める——水俣病と生きる

緒方正人 漁師



取材記

アートミーツケア叢書第3巻には5本のインタビューが収録されています。書籍の最後に収められているのは緒方正人さんのお話。編者の中川さんと事務局2名とで新幹線に乗り、新大阪から水俣まで。インタビューを前に丸1日水俣を歩き、今の水俣を伝える人たちに会いしたり、施設を訪れたりすることができました。

「緒方正人さんにぜひ話を聞きたい」——書籍の内容を検討している際に、もうずいぶんと前から決めていたことのように、中川さんから話がありました。しかしどのように連絡をとったらいいのかすらわかりません。さまざまな人や団体に相談し、今回の訪問が叶いました。相談に応じてくださった皆様に、あらためて感謝申し上げます。

緒方さんお会いできることが決まってからは、あらためて緒方さんの書かれた書籍や水俣にかんする書籍や記事にあたり、中川さんと事務局とで情報共有を重ねました。またせめて取材の前日は水俣の土地に一日身を置きたいと考え、現地で活動している人に一部コーディネートをお願いしました。

新型コロナウイルスの感染状況が気がかりでしたが、時期を見計らいながら熊本まで行き緒方さんにお会いできたことは、今になってみれば奇跡のように思えます。

新大阪から4時間ほどで到着した新水俣の駅で降りる乗客は少なく、さっぱりとした駅舎にはまだ新しさが残っていました。到着したその足で、一般財団法人水俣病センター相思社が運営する水俣病歴史考証館へ。もともとは水俣病患者と共同作業をするためのキノコ工場だった場所です。水俣に生まれ、今、考証館ではたらく人たちからは、かつて法律による認定制度が地域の分断をうみ、患者家族や親戚の

あいだでも話題に出すことすらタブーとなっていたということや、ご自身の幼い頃から現在に至るまでの故郷にたいする複雑な思いをお聞きました。教科書に書かれた過去の大きな出来事ではなく、土地や個々の記憶・経験が層のようにかさなった、長い時間の流れのなかにある水俣。お聞きした言葉を何度も反芻しながら外に出ると、日が沈みかけていて、考証館からみえる不知火海をしばらく眺めました。

次の日は朝から、水俣病資料館を訪問。実はその前に、緒方さんご夫婦に偶然お会いするという、うれしいハプニングがありました。翌日のインタビューに備えてご自宅までの道順を念のため確認していたところ、おふたりが家の外で漁の道具を手入れされていたのでした。この日はご挨拶だけをして帰りました。

その後、一般社団法人水俣病を語り継ぐ会理事の吉永利夫さんにコーディネートいただき、胎児性患者の滝下昌文さんのご自宅までうかがうことができました。吉永さんには夜までずっとご一緒していただき、水俣病の歴史をたどるように車でたくさん場所を連れて行っていただきました。吉永さんのご自宅では、ご自身が関わってこられた、水俣への修学旅行のプランニングの話などもお聞きし、とにかく、すさまじい情報量でした。「ないものねだりではなく、あるもの探し」という言葉からも、水俣という土地を愛しているということを終始感じました。

水俣病資料館はエコパークを見下ろす岬の先端に位置しています。水俣湾を埋め立ててつくられたエコパークの足元には、有機水銀を含んだ大量のヘドロや基準値を超えて汚染された魚が埋まっています。そして海をはさんですぐ向こうに見えるのは、恋路島。恋路島はここで起きていることをずっと見てきたとどなたかが言っていました。かつてこの島はもっと遠くにあったはずなのに、海が埋め立てられてこんなにも近くに見えるようになった、とも。



エコパークから恋路島をのぞむ

翌日、緒方さんのご自宅でお聞きしたお話はぜひじっくりと書籍をお読みいただければと思います。自分の生活や仕事、生きることすべてにどう染み込ませ実践していくのか、考え続けています。考えるより先に、すでにどこかに滲んでいるようなものかもしれないとも思います。

(事務局 中島香織)

叢書第3巻は水野大二郎さんらによる「TRANSITION—ままならない状況下の生活を記録するための試論」から始まります。9か月にわたって身近な家族が病とともに変化し、自身の生活もそれとともに変化せざるを得ない状況を、あたらしい研究と表現の形で記録しています。今までにない手法で人生の大きな出来事を記録することを試みるには、どのようなプロセスや発見、戸惑いがあったのでしょうか。

かつて慶應義塾大学で教鞭をとり、大学を地域・社会へと開く新しい学び場「三田の家」等の立ち上げに関わり、現在は京都に拠点をうつし、暮らしの中での表現を実践されている熊倉敬聡さんが、水野さん、研究を共にした大橋香奈さんと語り合いました。また、水野さんと大橋さんの取り組みをすこし離れたところから見守っていた加藤文俊さんにもお話を聞きました。

水野大二郎さん

京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授、
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科特別招聘教授

大橋香奈さん

東京経済大学コミュニケーション学部専任講師

加藤文俊さん

慶應義塾大学環境情報学部教授

聞き手

熊倉敬聡さん

芸術文化観光専門職大学 教授

熊倉 今回のインタビューでは、水野さん家族の、この数年間の変化について…言葉になりにくいことが多いと思うんですが…答えられる範囲で構わないので、伺ってみたいと思っています。

最初に、身近な人を亡くされた場合に、人によって、いろいろな受容の仕方、回復の仕方、回復できない仕方もあると思うんだけど…水野さんはなぜ、こういうプロジェクトというかたちをとろうと思ったのでしょうか。欲望なのか、宿命、使命なのか…。

水野 子供が欲しい。不妊治療をして。で、子供ができた、やったーとポジティブなところからスタートした。毎週産婦人科に行っていて、問題ないと思っていた。でも、体重が増えなかったり、食べられなかったり…おかしいなとなって、あるタイミングでいつもの産婦人科検診が、総合病院に転院、即時入院みたいになっていった。それくらいのタイミングから、なんか人生の雲行きがあまりやしいなと思ったんです。

2017年の6月、7月くらいに、加藤さんたち、当時の同僚の皆さんに、メールでとりあえず報告して。乳児院に子供を預けて、奥さんと闘病するってなったくらいのタイミングで、同じようにガン闘病している人のブログを見たんですけども、残念ですが全員亡くなっている。これは話にならないなど。次に、論文に当たってみました。そうすると、妊娠合併胃ガンっていうのは、予後が

非常に悪い、と。そういう論文ばかりで、これは厳しいな、という感じになった…。ガンだってわかって、3ヶ月くらいの間に。えー…なんていうんでしょう。諦め前提で、闘病をスタートするっていうところが、今振り返ると、個人的にはあったんですよ。

熊倉 それは、みえさんも共有していた？

水野 本人は最後まで、心のどこかで治らないなということは認識しながらも…できるだけ長く生きたいなっていう感じだったと思っています。だから、僕も、みえさんも……予定していたよりも早く死ぬだろうっていう認識があって…。それをどう受け止めるかっていうところから、話がスタートしたと思うんです。それが、闘病の話ですね。

同じ時期に、加藤さんと一緒に、大橋さんを指導していたんです。大橋さんの博士研究は、とても面白い研究です。「移動する家族」というテーマで、家族が世界中に離散していても、情報技術によって、ある種、常時接続されている。家を転々としながら、自分にとってのホームとは？と、ぐらついている。そういうことを研究して、人の生活を理解するということをされていて。自分もそうなのかもしれない、と思ったんですよね。

奥さんを病院に連れていくとか、子供を乳児院か

ら家に連れて帰って、また戻るとか、通勤するとか。なんか、一人でぐるぐるぐるぐる回っているなあと。僕が移動を止めると、家族がつながらないう感じになっていた…。そんな自分が、自分の研究をするっていうことが、今後のために必要なんじゃないかと思ったんですよ。

そもそも、その、亡くなるっていうのを前提に、記録をずっと取るっていうことをしていたもんですから…。それで大橋さんに「博論終わる前にすみませんが、次に、こういうことをやってみないですか」という話をして。そうしたら大橋さんが「それは今すぐ始めた方がいいんじゃないか」と。それで、これまでの経緯を話し、とりあえず持っているデータを全部、お渡しして。で「これから先は、行動記録をつけてください」とフィールドワークの手法を提示され、その手法に従ってやっていくことになったんですよ。

だから、最初の段階で、宿命、まあ運命的にもうやらないといけないなと思った。

1年くらい経ってから、世代継承みたいなことを、つまり、自分の子供が大きくなった時に、こんな生活があったんだよって見せるとか、研究として、同じようなことで苦しむ人もいるだろうから、ちゃんとこれを成立させて伝えるってことも必要なんじゃないかって思うようになった。だから後者の方は、欲望めいているといえば、欲望めいているかもしれないし。前者の方は、もう完全に、宿命というか、諦めとどう付き合うか、という感じだったと思います。

熊倉 そんな感じで、大橋さん、加藤さんが関わることがあった。人によっては、身近な人が亡くなった場合、すごくプライベートな出来事なので、他人が介入してくることを避ける、避けたいと思うかもしれないんですけども…。水野さんは、どういう受け入れ方をされていたんでしょうか？



水野 うーん……。まあ、まず、今回のプロジェクトに携わってくれた人たちは、仲が良かったんです。同僚であり、友人であり、学外でも学内でも一緒に活動していた。そういう関係性が前提となって、いろいろ共有する、話したり写真を見せたりすることに、個人的にはあまり違和感がありませんでした。…ちゃんと理解してくれるだろうっていう前提が自分の中にはあって。自分の置かれている状況の困難さとかが、ある程度共有できるんじゃないかなと思ってた。

熊倉 メインテーマである、トランジションについて、深掘りして聞きたい。ここでのトランジショ

ンには、いろんな位相がある感じがします。時間的な移動、地理的な移動、空間的トランジション。

ただ、今回、それだけではない気がしています。エスノグラフィのグラフィっていろんな訳し方がありますけど、記録を残すとか痕跡を残すとか…。そのグラフィという行為自体が、ある種のトランジションなんじゃないかと思いました。それを今回は、複数の人が関わってやっている。みえさんが亡くなって、家族にいろんなことが起きるっていう1つの事象が、いろんな人、いろんなメディアを通じてトランジットしていくという行程がある。それと同時に、もう何も語れない0人称のみえさんがいて、そのみえさんがこの広がりを作り出している感じもあって。

それと、記憶と記録という問題もある気がします。記録によって、不在になった記憶が蘇ってくる。だけど、記録することは、同時に、記憶の現実から離れる行為でもある。記録を通して生々しい記憶が蘇ってくるということと、逆に、自分だけではなくいろんな人が記録を通して関わることによって、生々しさから、自分を引き剥がすということを絶えず繰り返して行って、徐々に自分が受け入れ、回復していく。そういうプロセス全体が、今回の作品になっている。だからトランジションズなのかもしれない。

水野 ああ、複数形で。ありがとうございます。そこまで汲んでいただいて…。

記述する、メディア化して映像化する、人に伝えるといったことを通して、自分の記憶を外在化して、整理をつけていく。それを他者がどう認識してくれるかによって、自分を客観視するいわゆるオートエスノグラフィー実践の成果が、自分の受容プロセスに大きく関わっているのではないかと思います。

それと、今回、重要な示唆を与えてくれたのは、ジョン・アーリの『モビリティーズ—移動の社会学』という本でした。

2015年くらいに初めて読んだ時、僕としては目から鱗でした。なるほど、社会をもっと動的なものとして捉えないといけないなと。移動前提の社会とか、移動性ということを考えた時に、僕一人が移動の経験を語るんじゃなくて、他の人に語ってもらう、一緒に移動しながら語るとか、いろんな語り方、あるいはメディア実践のあり方があるなあって思っていたんですね。

大橋今の、移動と移行についての話。トランジションとモビリティーズの関係でいうと、最初は、モビリティーズをベースにしていたので、移動に注目して始まったんです。けれど、そこから状況が目まぐるしく変わっていった時に、だんだん、移動より移行なんじゃないかっていう話をし始めて。その理由が、移動ってどうしても、移動している主体と、移動させられている対象とがあって、移動させられている対象の変化は、移動という言葉では表現できていない。移行だと、そこも含ま

れるのかなって。だから、移行ってというのがすごく大事なコンセプトかもしれないって。



熊倉トランジションと、ケアとの関係についてはどうなのでしょう。自分へのケアはどういうふうになされていますか。

水野え〜…………う〜ん……………(沈黙)。さっき、大橋さんの存在がっていう話をしましたが、擬似セラピーみたいな状態だったこともあったんですね。というのは、大橋さんと僕とで、最初に決めた週1回インタビューは、最後まで結構頑張って守り通したんです。ずーっと真面目に。偉いなと思って(笑)。で、それが、「今、どんな状況に自分はいて、どうなんだ」っていうことについて話し続けるみたいなことが、うまく乗り越えられた一因になったんじゃないかなとは思ってますよ。…………大橋さんが逆にしんどくなっているんじゃないかって(笑)。

大橋それは、やはり、ものすごくしんどかったで

すよ(笑)。私が、やってきたエスノグラフィーの研究では、調査の対象になる人と、まず関係性を築いてからやるのが想定されているんですけど、今回はそんな悠長なことは言ってもらえない状況で。闘病的にもものすごくしんどい状況に、いきなり飛び込んで、みえさんとの関係がゼロからスタートした…。その時、みえさんがどう思うんだろうかっていうのは、ものすごくあって。私、みえさんのTwitterを2012年から、何年分も全部読んで。どんな人なんだろうって。ものすごく芯の強い女性だし、ものすごくしなやかで柔らかいけど、好き嫌いもはっきりとある。なんていうのかなあ。みえさんがちゃんと認めてくれる仕事をしないと…。どう始めればいいのか、どう進めていいのかって…。ただ一方で、水野先生が置かれている状況を考えた時に…、2014年に私の父親が突然亡くなっているんですけど、その時に兄が適応障害という状態になり、心身にさまざまな症状が出ました。結局2年間治療したんです。彼はちょうど引っ越ししたり、転職した直後に、突然、そういうことがあって、環境の移行についていけなかった。その彼が立ち直るプロセスで、大事だったのは、やっぱり人に話すということと、クリアできる課題に取り組んで、そのことを私に報告するっていうプロセスだったんですね。それを経験的に見ていたので、みえさんが亡くなって、大きな環境の変化が起きた時に、記録することとか、人に話すことは大事なんじゃないかって感覚的には思っていました。

水野そうですね（沈黙）。まあ、真面目にやりました。ほんとに（笑）。大変だなと思う時もある。でも、ずーっとやるしかないなって。で、ずーっとやった。

熊倉自分をケアするっていうことに関して。それ以外に何かありました？

水野遺品整理と、引っ越しの準備を、ちまちまちまちまやっていた記憶があって。1個1個のものと、どう付き合いを終えるかみたいなことが、なんか、整理をつけるっていう意味で、一人でそれができていたっていうのは、それなりに意味がある時間だったような気がします。それを可能にする、擬似的な独身の時間みたいなのがあったのはよかったですかね。

それから京都に引っ越して、小さな移動、徒歩を前提とした移動で生活を成り立たせることができているっていうのが、だいぶ違うことだなと思いますね。

熊倉それは、自分が回復していくことにつながる？

水野そうですね！非常に露骨につながっているなあと。今は、家から歩いてすぐのところに、友達が何人か住んでいる。…なんかあったら、

すぐ預けて、助けてもらうっていうのが容易くなっていて…、子供の面倒をみるとか、子供の話を相談するとかいうことを通して、受容みたいなことが促進されたのかなと思います。

熊倉最後にどうしてもお聞きしたいことがあります。このプロジェクトについて、みえさん本人はどう思っていたのか。

水野それよく聞かれるんですよ。え〜…、話はもちろんしたんですよ。記録を取りたいと。で、大橋さんという人がいて、取ってもらおうと思うと言った時は、入院何回目かの、病院だったんです。いいですっていうか、ああ、わかったみたいな感じで。大橋さんとみえさんが初めて会った時も、別に特に、何もなしでしたよね。

大橋にこやかに迎えていただいて。で、特に、その話を聞かれることもなく、もう了解しているという感じだったんですけども、一方で、その時のみえさんは、すでに体力がだいぶ落ちていて…。なので、みえさんに対して、私がいることがストレスになってはいけないって。私が撮影者として調査者として現場に行くのはやめた方がいいって、その日に思ったんです。でも、そこは私の想像でしかないんですけども、表現者、研究者としての先生を、1番応援して、愛していたのはみえさんだと思うんですよ。で、その意味で、やっぱり、水野先生がやるべきだと思ったプロジェクトを

やった方が良いということ、思っていたんじゃないかなって。すごく勝手な解釈ですけどね。このことに対して、みえさんが多くを、こうしちゃダメとか、こうして欲しいとか言わないっていうところも、みえさんらしいところだったんじゃないかな。

水野…亡くなる直前まで、何かにつけスマホで撮影とかしていたんですけども、一度も、撮影するのやめてくれと言われたことはないんですよ。それは一回もなかったんですよ。何撮影してるのって聞くこともなかった。そういう意味では、撮ること自体に、なんの違和感もなかったんだろうな。というか、特にその、記録を撮ること自体は重要であるというふうにな彼女は理解していたんじゃないかなと思います。

加藤文俊さんから見た

「TRANSITION」

ままならない状況下の生活を
記録するための試論



水野さんと大橋さんから初めて話を聞いた時、2人がやろうとしていることは、想像するだけで大変なことだと思いました。一体どうなるんだろう、どんなものが出来るんだろうって思った。ある時に「最初に決めた通り、毎週、インタビューをしていた」と聞いて、これはちゃんとまとまるんだなと思いました。最初に決めた、そのことが適切だったのかどうかはその時判断できなかったと思いますけど、とにかく決めて、頑固にやり通した。その頑張りが、感情の動きが戻れる場所、記録を作った。積み重ねられた記録は、その時々自分や相手との関係を、もう1回読み直すための材料になる。ドキュメンタリーのクオリティを左右するのは、そこだと思います。

今回、2人は、表現と研究の両方に取り組まれた。その2つのいずれかだったら、もたなかったんじゃないかな。家族が病気に侵されていくという状況。仮に記録をとってと言われても、単なる記録者として、そこにはいられないんじゃないか。変な言い方だけど、2人とも研究者であったということと、表現に関心を持っていたということが、毎日のバランスをとることを可能にした。研究や表現という意味でのルーティーンがあったから、壊れなかったというか、そのまま状況が動いたように僕には思えます。ただ、どこでも実施可能な調査研究の方法ではない。今回は状況がそれを許した。その意味で、非常に稀有な研究であり、表現活動だと思います。



水野さん、大橋さんによる共同監督作品『Transition』(2019) の紹介画像。出典 | <https://medium.com/documentary-film-transition>

水野大二郎 (みずの・だいじろう)

www.daijirom.com

京都工芸繊維大学特任教授。慶應義塾大学大学院特別招聘教授。Royal College of Art 修士・博士課程後期修了、芸術博士（ファッションデザイン）。共著に『Fabに何が可能か』（フィルムアート社、2014）、『インクルーシブデザイン』（学芸出版社、2014）、監訳書に『クリティカル・デザインとはなにか?』（BNN、2019年）などがある。

大橋香奈 (おおはし・かな)

visual-ethnography-lab.tokyo

東京経済大学専任講師。英国のMet FilmSchoolドキュメンタリーフィルム制作プログラム修了。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了、博士（政策・メディア）。水野大二郎との共同監督作品『Transition』（2019）がアムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭（IDFA）2019およびNippon Connection 2020に入選。

加藤文俊 (かとう・ふみとし)

fklab.today

慶應義塾大学教授。ラトガース大学大学院修了、Ph.D（コミュニケーション）。近著に『ワークショップをとらえなおす』（ひつじ書房、2018）、『会議のマネジメント』（中央公論新社、2016）、『おべんとと日本人』（草思社、2015）、『つながるカレー』（共著、フィルムアート社、2014）などがある。

熊倉敬聡 (くまくら・たかあき)

ourslab.wixsite.com/ours

芸術文化観光専門職大学教授。パリ第7大学博士課程修了、学術博士（フランス文学）。『三田の家』、『Impact Hub Kyoto』などを立ち上げ、運営。著作に『藝術2.0』、『瞑想とギフトエコノミー』、『汎瞑想』、『美学特殊C』、『脱芸術／脱資本主義論』。



アートミーツケア学会 入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのおみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1 大会の開催

講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2 調査研究の推進

「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3 学会誌の発行

アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4 ニュースレターの発行

日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5 フォーラム、シンポジウムの開催

特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6 プログラムの開発、プロジェクトの実施

ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7 国際交流の推進

アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関する国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

- 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先 アートミーツケア学会
口座番号 00920-4-252135
- ご住所、電話番号、お名前、会員種類をご記入のうえ、年会費の払込票(コピー可)をそえて事務局までお送りください。
- 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

個人会員 一般10,000円 学生5,000円
賛助会員 30,000円

役員(敬称略)

会長

鷺田清一(せんだいメディアテーク館長)

副会長

中川真(大阪市立大学都市研究プラザ特任教授)
森口ゆたか(美術家、近畿大学文芸学部教授)

常務理事

播磨靖夫(一般財団法人たんぼほの家理事長)

理事

秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)
岩田祐佳梨(NPO法人チア・アート理事長)
奥村伸二(社会医療法人同仁会耳原総合病院病院長)
笠原広一(東京学芸大学教育学部・連合大学院博士課程准教授)
坂倉杏介(京都市大学都市生活学部准教授、三田の家LLP代表)
関口怜子(ハート&アート空間ピーアイ代表)
ダーリング・ブルース(美術史家)
銅金裕司(メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授)
中村美亜(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
並河恵美子(特定非営利活動法人芸術資源開発機構(ARDAアルダ)理事)
野津亮(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授)
野呂田理恵子(女子美術大学准教授)
日野陽子(京都教育大学准教授)
ほんまなほ(大阪大学COデザイン・センター/文学研究科准教授)
水野哲雄(京都造形芸術大学名誉教授)
三輪敬之(早稲田大学名誉教授)
山口(中上)悦子(大阪市立大学医学部付属病院医療の質・安全管理部部長/病院教授)
横川善正(金沢美術工芸大学名誉教授)

監事

田中みわ子(東日本国際大学教授)
椋伸江(株式会社ダブディビ・デザイン代表取締役)

編集後記

大会初のオンライン開催など、この1年は新しい試みの連続でした。ご協力ありがとうございました。思い起こせば、昨年度の宿泊付き出張(叢書第3巻の取材で水俣を訪れたのみ。その分、不知火の海と緒方正人さんの姿が脳裏に焼き付いています。(後安美紀)

今回はオンライン配信を主とした大会となり、どの企画も応募があるだろうかと心配でしたが、蓋をあけてみれば充実の内容でした。これまでは、さまざまな事情で大会への参加が難しかった人も参加できたという声があった一方、情報保障などをより充実させていきたいです。(中島香織)

叢書の第三巻は、どうにもならないものも折り合いをつけ生きる私たちの〈生〉そのものを記録するものになりました。原稿を読みながら、受容する覚悟というか勇気こそが回復につながるように思いました。多くのおみなさんに届けたいと思います。(森下静香)

アートミーツケア学会 ニュースレター Vol.19

2021年6月16日発行

発行 | アートミーツケア学会

<http://artmeetscare.org/>

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

一般財団法人たんぼほの家内

Tel. 0742-43-7055

Fax. 0742-49-5501

E-mail. art-care@popo.or.jp

デザイン | 長岡綾子(長岡デザイン)